

縄文晩期の石器

—— 西北九州における縄文時代の石器研究 (六) ——

はじめに

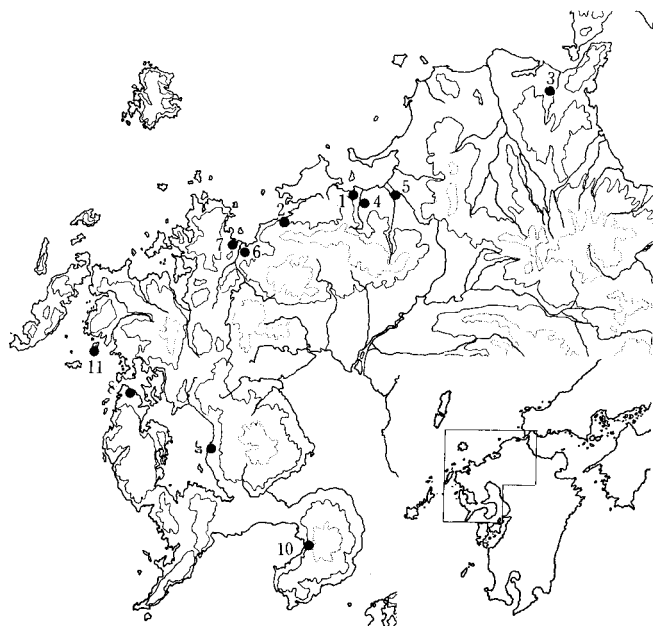
「西北九州における縄文時代の石器研究」として、これまでに、縦長剥片、石銚、石匙、彫器、折断剥片とサイドブレイドなど、黒曜石・サヌカイト製の剥片石器について述べる機会があった。¹⁾ これらのことから、長崎・佐賀、それに福岡および熊本の西北部を含む、いわゆる西北九州の地域では、縄文時代の中・後期を主体とする時期に、「鈴桶型縦長剥片剝離技術」による縦長剥片とそれを用いた剥片石器群の存在を明らかにすることができた。さらに、この技術の一つの基礎とする西北九州の石器文化に対して、「縦長剥片石器文化」と仮称して把握することを試みた。

しかしながら、同じ西北九州地域でも縄文時代晩期の時期では、鈴桶型縦長剥片剝離技術およびそれを用いた石器群が認められず、後期までの縦長剥片石器文化とは一線を画する様相がみうけられ、それについて晩期も縄文時代に普遍的な打製石器が大きなウェイトを占めているのである。いっぽう、晩期の後半には大陸系の磨

橘 昌 信

製石器を伴う遺跡が知られているなど、西北九州の縄文晩期は、石器の面においても複雑な様相をうかがうことができる。この晩期の複雑な様相は、おそらく五〜六百年続いたであろう晩期の時間的な幅およびその変遷に主たる要因が求められるであろう。また、同じ西北九州の地域の中での、自然および人文地理的な要素も当然予想されよう。

そこで、西北九州における縄文時代晩期の主要な遺跡について剥片石器を中心に剥片剥離技術や石器組成など、これまでの五回の拙稿で、ほとんど触れることがなかった、西北九州での縄文晩期の石器を概観することにした。 (第一図)



第1図 西北九州地域の縄文晩期主要遺跡

- 1 十郎川遺跡, 2 広田遺跡, 3 長行遺跡, 4 有田七田前遺跡
 5 諸岡遺跡(F区), 6 宇木汲田遺跡, 7 菜畑遺跡, 8 ケイマンゴー遺跡
 9 黒丸遺跡, 10 朝日山遺跡, 11 宮の本遺跡

一、晩期の主要遺跡出土の石器

1 十郎川遺跡（福岡市西区大字下山門）

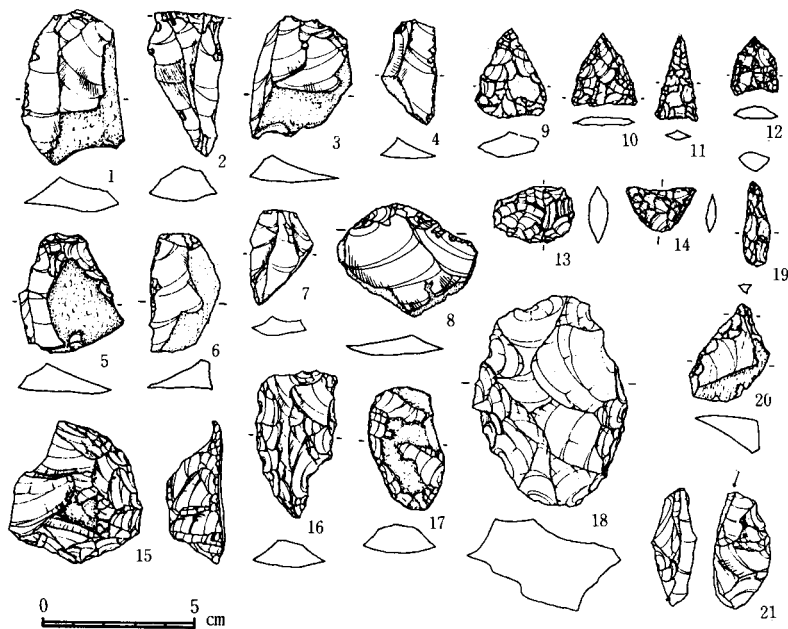
遺跡は早良平野西側の、博多湾に向つて北流する十郎川に接した低湿地に立地しており、縄文晩期末の夜臼式土器を主体とするB区域の標高は約三メートルである。発掘調査は昭和五六年、団地建設に伴う事前調査として行なわれた。

十郎川遺跡B区域から多量の土器と石器類が出土しているが、その土器の大半は夜臼式土器で占められており、ごくわずか、山ノ寺式土器と板付I式土器が発見されている。なお、板付I式土器の出土量の割合は一・三％である。

いっぽう、石器類については、黒曜石を主体とする石核・剥片・碎片など一万点に近い膨大な量の石器類が出土している。石器は五八八点であり、このうち剥片石器は四四〇点、礫核石器類は一四八点となっている。剥片石器の中で、定型化された石器は、石鏃がもつとも多く五〇点で、次に、搔器・削器の二六点である。ほかに、サイドブレードが一三点、石錐七点、彫器四点という順である。これらの定型的な石器が剥片石器の中で占める割合は二三％である。残りは、剥片の一部に二次加工が施された不定形な石器と、使用痕のある剥片で占められており、定型化されていない剥片石器がいかに多いかが明らかである。いっぽう、出土石器の約四分の一の礫核石器類は、磨製石器と礫塊石器とに大別できる。磨製石器では石斧が三七点と多く、この中には

柱状片刃石斧六点、扁平片刃石斧四点、のみ状石斧三点が含まれる。石庖丁も比較的多く一九点、石鎌は一〇点出土している。ほかに磨製の石錐が四点と磨製石鏃が一点ある。礫塊石器では、砥石が二二点ともっとも多く、次に二一点の敲石、磨石一五点の順になっており、台石・石皿は共に少なくそれぞれ二点と一点である。(第2図)

以上が、十郎川遺跡出土の石器の概略である。これらの縄文晩期末の石器の中で、注目される要素として、二つのことがあげられる。その一つは、膨大な量の黒曜石製の剥片・碎片それに石核の存在であり、同時に石器全体の中で約四分の三が剥片石



第2図 十郎川遺跡出土の剥片石器〔註2より〕

1～8 剥片・使用痕剥片, 9～12 石鏃, 13・14 サイドブレイド
15～18 搔器・削器, 19・20 石錐, 21 彫器

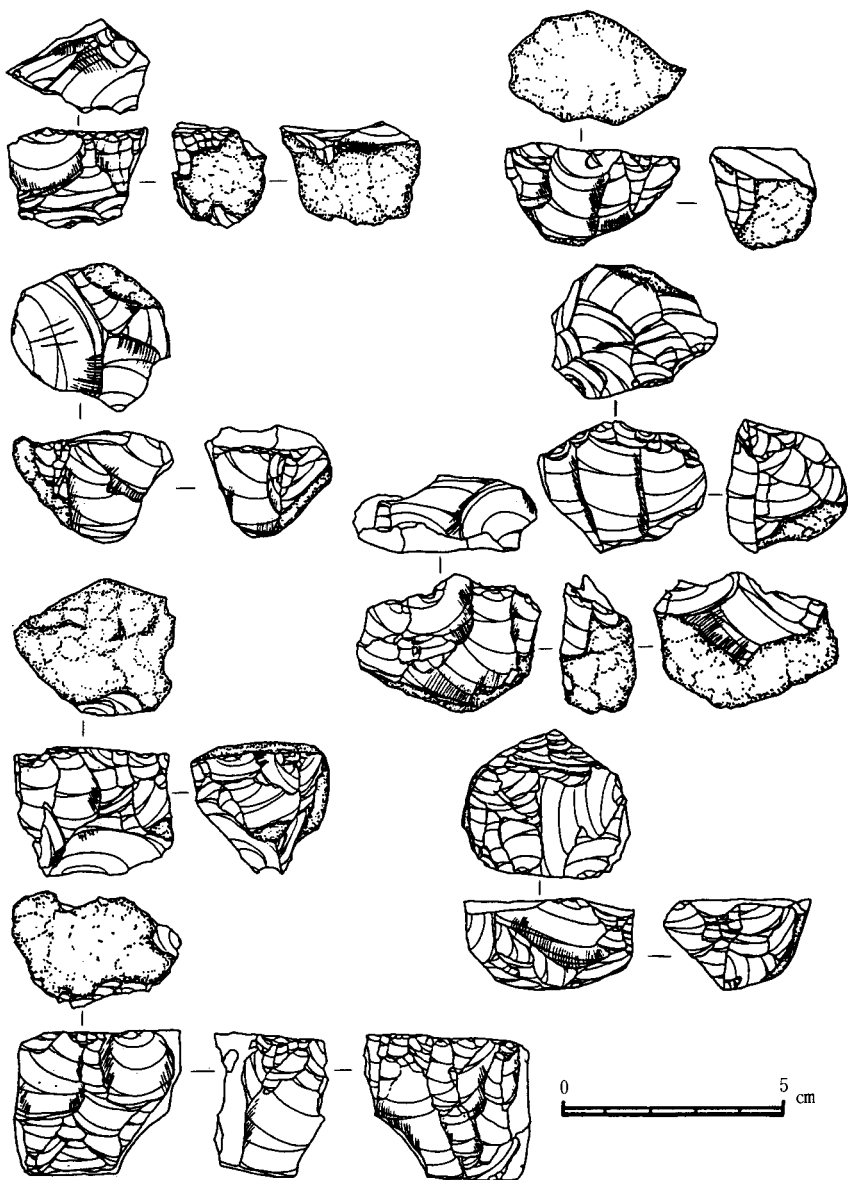
器で占められていることである。いま一つは、柱状片刃石斧や石庖丁それに磨製石鏃などのいわゆる大陸系の磨製石器の存在である。

十郎川遺跡における剥片石器の石材の九〇%以上は伊万里市腰岳産の黒曜石で占められている。それらの黒曜石を用いての剥片石器の製作が当遺跡内で行なわれており、二六五点もの数にのぼる石核の出土、さらにこの数十倍もの数の剥片・碎片の存在がこのことを如実に物語っているのである。そこで、西北九州における縄文時代晩期の剥片石器の製作についてを、これらの資料から考える。

石核 黒曜石製の石核は二六五点出土しており、石核の大きさや形は、数が多いこともあつて多彩であるが、それらは剥離技術や全体の形などから四類に大別することができそうである。(第3図)

I類の石核の全体的な形は円柱・円錐・角柱・角錐と異なっている。石核の打面は角礫あるいは円礫の自然面(表皮)をそのまま利用したものが大半を占めている。剥離作業面は正面の一面のみで、しかも上端の一方からのみ剥離が行なわれており、側面・背面に自然面を残している。このI類は剥離作業が進行するにしたがつて、高さ・幅に対して厚さが薄くなっており、全体に扁平な形態になる。剥離作業の進行状況に呼応するかのように、打面は大きな剥離面からなる平坦打面や調整打面のもが顕著になる傾向がうかがえる。

II類の石核は、高さ・幅・厚さがほぼ等しく、全体の形は多面体を呈しており、剥離作業が進行していないものは側面や背面に自然面を多く残している。I類は一つの打面が準備されていたのに対して、このII類は二回以上の打面転移が行なわれている。打面の転移は上面から下面、さらに側面というような決った順序や方法は認められず、原礫の形に左右されて、アトラングダムに行なわれている。打面の多くも自然面をそのまま利用



第3図 十郎川遺跡出土の石核〔註2より〕

している。

Ⅲ類の石核は、一面にのみ打面を持つ単設打面である点はⅠ類と同様であるが、剝離作業は正面から側面、さらに背面へと打面の周囲をまわるように進行する。打面は自然打面と平坦打面の二つが存在する。

Ⅳ類の石核は、上下の両端に打面を有する両設打面の石核で、剝離作業が進行しているものは扁平な形になる。自然面をそのまま打面に用いたものが大部分である。

以上、四類に大別した石核の大半はⅠ・Ⅱ類で占められⅢ・Ⅳ類は少なく共に十数点である。大きさでは最大高、最大幅、最大厚のいずれも、三センチ前後に集中する傾向がうかがえ、また、石核の多くは、黒曜石の自然面がどこかの面に残っている。その自然面の状態から原石の大きさを推定すると、四センチを大きく超えるものをほとんどみることができず、当遺跡に持ち込まれた原石の大きさをうかがうことができる。

剝片 次に、先に述べた石核と剝片との関連についての一端を、大きさの上からみることにする。石核から剝離された目的な剝片、すなわち、剝片石器の素材を目的とした剝片ないしそれ自体を石器として用いることを目的とした剝片の大きさ―長さ―幅―については、使用痕のある剝片石器にもつともよく示されている。この石器は二次加工が施されていないため、剝片の原形をそのままとどめており、しかも、石器として使用された痕跡を残しているから明らかに目的な剝片である。使用痕のある剝片の中から、打面および末端を残している七二点のうち、縦長剝片の最大長は五・八センチ、最大幅は二・九センチであり、最小は一・四センチ×二・三センチである。全体的には、長さ二・五―三・五センチ、幅は二・〇―三・〇センチの大きさに集中する傾向がある。この大きさは、二次加工のある剝片石器や搔器・削器についてもほぼ同じであり、十郎川遺跡

での剥片石器の素材である目的的な剥片の平均的な大きさとみなすことができそうである。全体的な形としては、長さが幅に対してややまさる程度で、長さが幅の二倍以上ある縦長剥片とは異なり、どちらかといえばずんぐりした形に近いものである。

さて、石核の大きさについては、先に述べたように、大半のもの高さ（剥片の長さにあたる）は三センチ前後であり、さらに自然面の状況から原石の大きさが四センチ前後になることから、剥片石器の素材となった目的的な剥片の長さを得ることは可能であり、石核の高さと剥片の長さはほぼ一致するとみなされる。いっぽう、幅については、剥片石器の幅は二・〇〜三・〇センチあるのに対して、石核の最終剥離面に残されている剥片の剥離面の幅は一・〇センチ前後のものが大部分であり、剥片の幅との開きがみられるのである。この差については、限られた大きさの原石から単設打面・両設打面、打面転移という方法によって、アトランダムに剥離作業を行ない、剥離された剥片の中から適当な大きさのものを選択して剥片石器に用いることによって解消されたものと考えることができる。

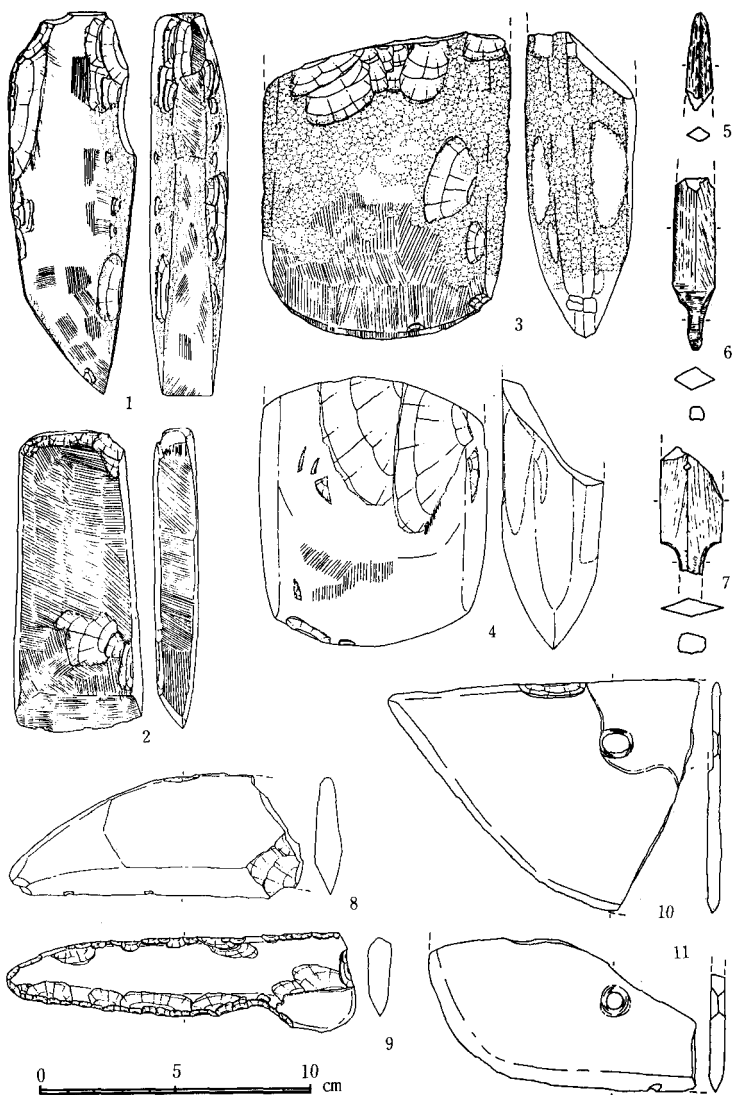
十郎川遺跡での剥片剥離技術は、西北九州において縄文後期を中心に展開する鈴桶型剥片剥離技術を基本とする縦長剥片石器の文化のそれとは大きな違いがみい出せる。後期の剥片剥離技術に比較して、非能率的とも思える剥片剥離技術しか持ちえなかったにもかかわらず、それでいて、晩期終末まで縄文時代に普遍的な打製の剥片石器の占めるウェイトが高いのである。

大陸系磨製石器 十郎川遺跡では、先に述べた剥片石器と共に大陸系の磨製石器が出土している。（第4図）これらの磨製石斧は縄文時代に存在しなかったものであり、明らかに大陸からの影響を示すものである。

石庖丁は未製品・破損品を含めて一九点あり、形態は外灣刃の半月形あるいは逆三角形をしており、石庖丁での古いタイプとみなされるものである。石鎌は一〇点出土しており、刃部が直線的なものと、わずかに内灣したものとがあり、加工は研磨による仕上げをしたものと、研磨の後に小さな調整剝離を施したものである。

石材は石庖丁と同様に頁岩質砂岩と頁岩が用いられている。石斧では、蛤刃石斧があり、これは長さが一五センチ前後、幅が八センチ、厚さが三〜四センチの比較的大形のもの、長さ約一〇センチ、幅が約四センチ、厚さが二センチほどの小形のものがある。石材は砂岩質の堆積岩が用いられている。これらの石庖丁や蛤刃石斧はいずれも唐津市の菜畑遺跡や板付遺跡などで出土しているものに類似しており、縄文晩期終末あるいは弥生時代前期初頭の特徴をよく表しているといえよう。このほか、方柱状をした抉入部をもつ片刃石斧や扁平片刃石斧が出土しており、これらは縄文時代の石器にはみられなかったものである。また、石庖丁の穿孔具と考えられる磨製の石錐は、当遺跡出土の石庖丁にみられる穿孔の大きさと符合している。磨製石錐は三点出土しており、いずれも欠損しているが、長さに対して幅が狭く細長い形態を呈する。身部中央に明瞭な鑄があり、横断面は菱形をしている。十郎川遺跡ではこれらの磨製石器と共に、二二点の砥石が出土しており、未製品の磨製石器の存在と考え合わせ、当地で、磨製石器の製作が行なわれていたことをうかがうことができる。

十郎川遺跡は夜臼式土器を主体する時期の遺跡であることは前に述べた通りであるが、全体の土器のうち、一・三%の板付Ⅰ式土器が含まれている。そこで、大陸系の磨製石斧の時期が問題とされよう。すなわち、夜臼式土器に板付Ⅰ式土器がわずかではあるが共伴する時期に伴うのか、それとも、夜臼式土器の単純な時期にすでに製作・使用されていたかということである。早良平野の北西に位置する晩期の遺跡で、いつごろから大



第4図 十郎川遺跡出土の大陸系磨製石器〔註2より〕

1 柱状扶入石斧, 2 扁平片刃石斧, 3・4 蛤刃石斧, 5~7 磨製石鋸
8・9 石鎌, 10・11 石庖丁

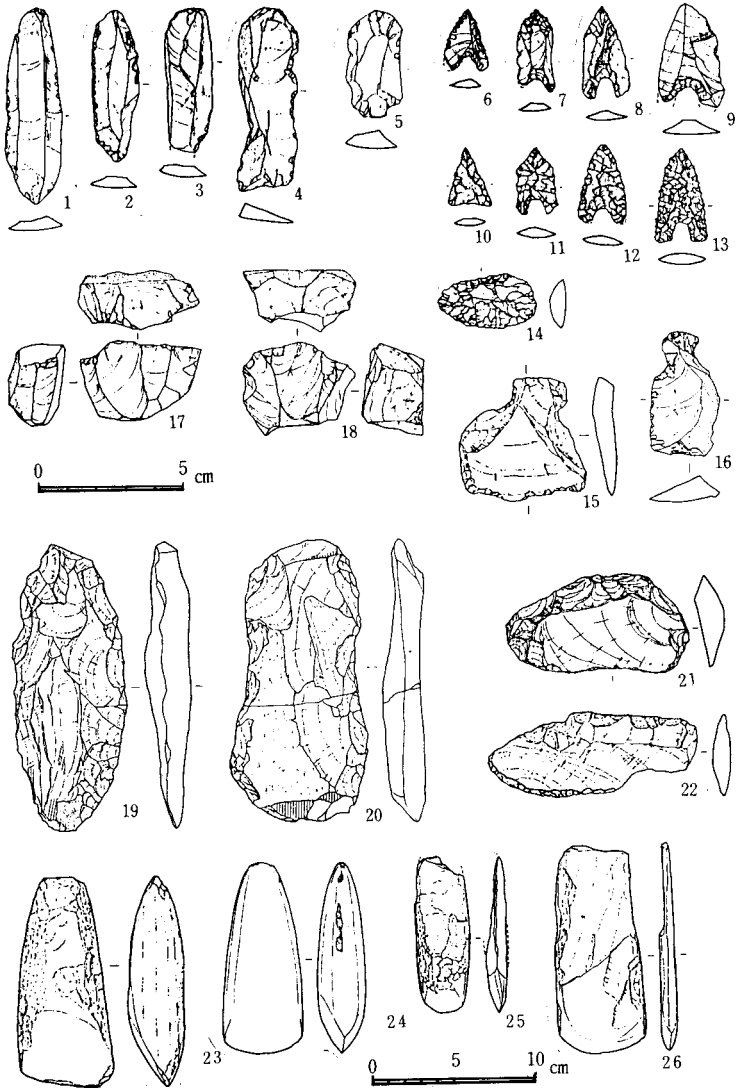
陸系の磨製石器の製作や使用がはじまったのかは大きな問題である。

西北九州地域での晩期の遺跡で、剥片石器および剥片剥離技術についての好資料が得られている遺跡や、比較的まとまった石器が出土している遺跡について、以下、簡単に触れることにする。

2 広田遺跡（福岡県糸島郡二丈町大字吉井）

十郎川遺跡の西、福岡市と唐津市のほぼ中間に位置し、福吉川とその支流東川に挟まれた、標高約十一メートルの丘陵裾部に立地している当遺跡では、磨消縄文の土器から刻み目突帯文の土器まで出土しているが、その主体は後期末葉から晩期前葉の粗製深鉢形土器と精製の鉢形・浅鉢形土器で占められている。広田遺跡は西北九州地域、特に玄海灘に面した地域での縄文時代後期末および晩期初頭の時期の代表的な遺跡とみなすことができる。多量の土器もさることながら、石器も興味深いものが数多く出土している。⁽³⁾（第5図）

まず、もつとも目をひくものが、一六一点の打製石斧である。この打製石斧のうち、約三分の二は、厚さが二センチ以下であり、いわゆる扁平打製石斧と考えられるもので、短冊形や撥形を基本形としている。磨製石斧は四三点あり、乳棒状・短冊状を呈するものが顕著で、しかも、石斧の一部に剝離面や敲打面を残している。外に、磨石が二〇点、石皿が一三点、砥石一四点、それに礫石錘一二点、有溝石錘一点が出土している。いっぽう、剥片石器では、石鏃がもつとも多く一一一点、ついで、九九点の削器・搔器がある。この削器・搔器の内には、石庖丁形石器あるいは石鎌形石器と判断できるものが含まれている。また、一端につまみを有する、縦形と横形の石匙が三点出土している。石刃は五四点出土しており、この内にサイドブレードと考えられるも



第5図 広田遺跡出土の石器〔註3より〕

1～4 使用痕剥片, 5 つまみ形石器, 6～13 石鋸, 14 サイドブレイド,
 15・16 石匙, 17・18 石核, 19・20 扁平打製石斧, 21・22 石庖丁形石器,
 23～26 磨製石斧

のが二〇点あるほか、二次加工のある剥片や使用痕のある剥片が含まれているものと考えられる。注目すべきことは、石刃として分類された石器は、鈴桶型剥片剥離技術によるものと判断できることである。石刃の大きさ（長さ幅）、打面部のあり方、剥離方向などにその特徴を抽出することができる。つまみ形石器・石錐の素材にも同様な傾向が看取される。石核は一五点出土しているが、その石核の特徴は、先の石刃（縦長剥片）にみられる特徴とは異なっている。「鈴桶型石核」も出土していない。石刃および石錐・つまみ形石器の素材である黒曜石製の縦長剥片は、何らかの方法で搬入されたと考えなくてはならないであろう。

繩文後期末ないし晩期初頭と考えられる広田遺跡出土の石器では、扁平打製石斧を含む大量の打製石斧の存在、それに削器・搔器の中に石庖丁形石器・石鎌形石器が認められることに一つの特徴が見い出せよう。それと共に鈴桶型剥片剥離技術によると判断できる縦長剥片およびそれを素材に用いた石器―剥片鏃・石刃・石錐・つまみ形石器・サイドブレイドなどが、明らかに存在していることも注目に与いする。十郎川遺跡の晩期終末では、鈴桶型の剥片剥離技術がまったく消失していたのであるが、後期末あるいは晩期初頭の時期にはまだ存在することが、広田遺跡で確認されたことになる。このほか、当遺跡では、石棒・石刀・御物石器・十字型石器などの石製品が二五点出土していることも重視されよう。

3 長行遺跡（福岡県北九州市小倉南区大字長行）

長行遺跡は、北九州市のほぼ中央を北流する紫川中流域の低台地と独立丘陵に挟まれた標高約三〇メートルの低地に立地している繩文晩期の遺跡である。当遺跡では、多量の土器・石器と共に、三六基もの土壙が発見

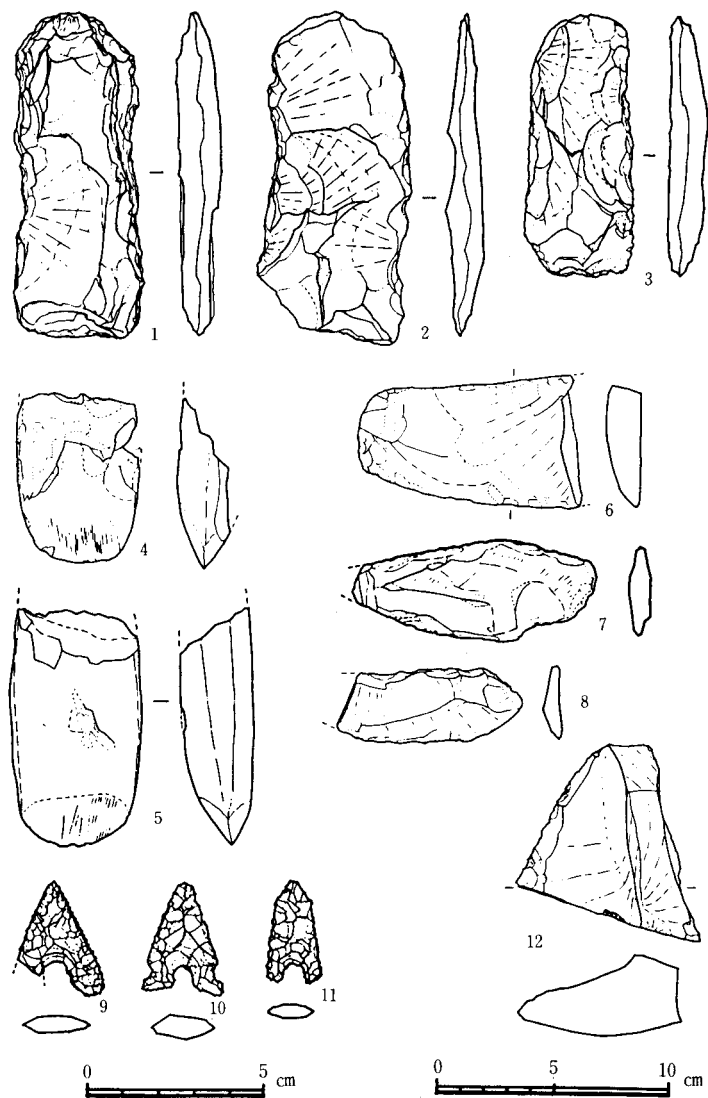
されており、堅果類などの貯蔵用と考えられている。時期については、土器の特徴および器種構成などから晩期前半おわりの突帯文が出現するころを想定している。あるいは、時間的に多少の幅を有するものと思われるが、大まかに晩期の中頃と考えて大過なからう。

さて、当遺跡から一一五点の石器が出土しており、そのうち、約六〇%が扁平打製石斧で占められている。扁平打製石斧以外の磨製および打製の石斧は一五点である。剝片石器が一七点あり、それらは削器・石庖丁形石器と判断できるものである。外に、磨石五点、石皿・砥石が各二点、敲石・凹石が各一点であり、石鏃はわずか三点である。この遺跡での石器の特徴としては、扁平打製石斧のウェイトが非常に大きいことと、その反面、剝片石器、特に黒曜石製の石器が皆無に近いこと、さらに剝片類がまったくみられないことなどを指適できよう。(第6図)

4 有田七田前遺跡(福岡市早良区大字有田)

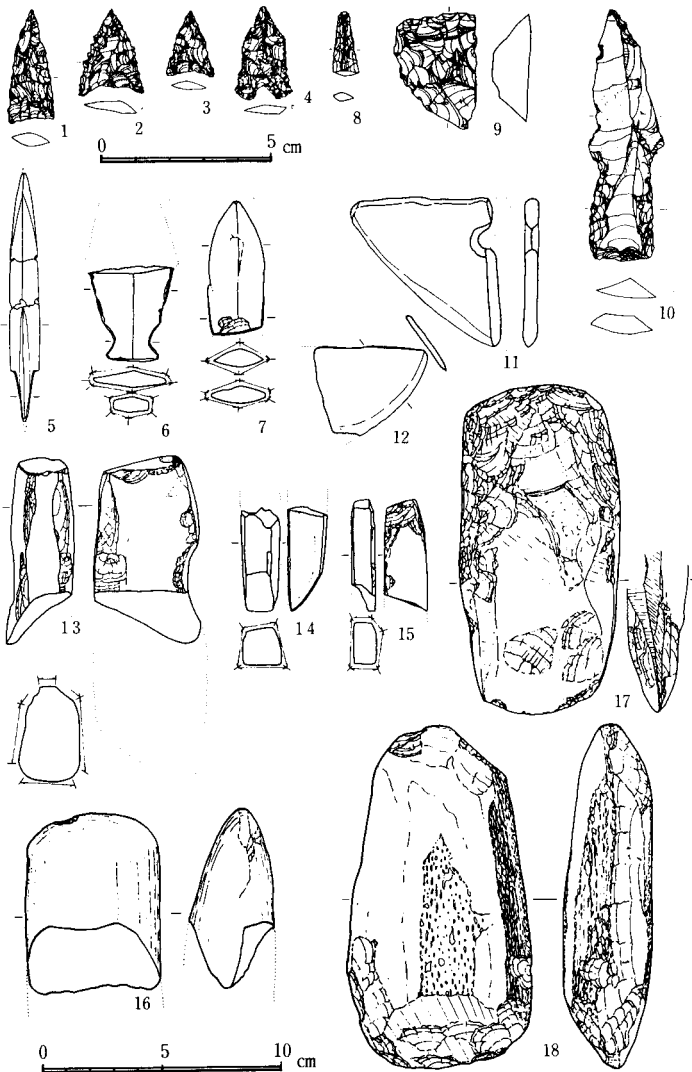
当遺跡は室見川により形成された早良平野のほぼ中央に位置し、標高は七・五メートルである。多量の土器が出土しており、夜白式土器を主体とする晩期末の時期があたえられている。⁵⁾

石器類では剝片・碎片・石核などをのぞいた石器は八六点出土している。石鏃がもつと多く未製品を含めて三八点あり、出土石器の四四%を占めている。この石鏃のうち、一点が磨製石鏃であり、外はいずれも打製石鏃で、しかも二点以外は黒曜石製である。石斧は二四点と次に多く、しかもその種類は多彩である。すなわち、磨製の蛤刃石斧一五点、扁平片刃石斧三点、柱状片刃石斧三点、抉入片刃石斧一点、それに打製石斧二点であ



第6図 長行遺跡出土の石器〔註4より〕

1～3 扁平打製石斧，4・5 磨製石斧，6～8 石庖丁形石器，
9～11 石鎌，12 削器



第7図 有田七田前遺跡出土の石器〔註5より〕

1～4 石鏃, 5 磨製石鏃, 6・7 石剣, 8 石錐, 9 搔器, 10 石槍,
 11・12 石庖丁, 13 柱状挟入石斧, 14・15 柱状片刃石斧, 16～18 蛤刃
 石斧

る。さらに、砥石六点と石錘五点と続いており、外に一〇三点出土している石器として、石庖丁・打製石鎌・磨製石剣・石槍・石錐・石匙もしくは搔器・磨石・礫器とその種類は豊富である。(第7図)

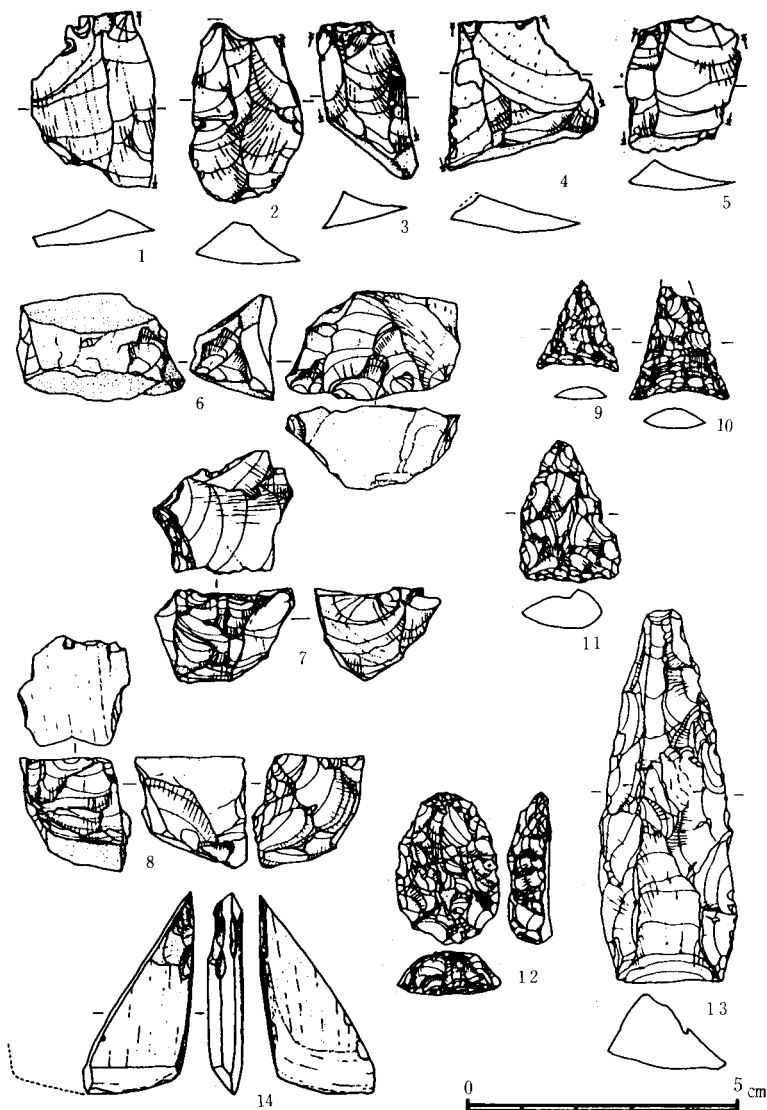
早良平野のほぼ中央に位置する晩期末の有田七田前遺跡の石器の特徴としては、縄文時代に普遍的に存在する各種の剥片素材の打製石器と共に、大陸系の石器とされる磨製石鏃・石剣・石庖丁・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧・挟入石斧などが、点数は少ないが共伴していることである。長行遺跡で多量に出土していた扁平打製石斧はまったくみられない。剥片や碎片も出土しているようであるが、報告書からはそれらについてはまったく知ることができない。

5 諸岡遺跡F区(福岡市博多区大字諸岡)

板付遺跡に隣接する福岡平野の当遺跡で、夜白式土器を単純に出土する包含層が認められ、夜白式土器と共に石器類が出土している。⁽⁶⁾

剥片石器では、石鏃・尖頭状石器(槍先形尖頭器)・搔器・削器、それに使用痕のある剥片などがある。礫核石器では扁平片刃石斧・磨製石斧・砥石などが出土しており、ほかに黒曜石製の石核六点が存在する。これらの石器類の数はそれぞれ少ないが、福岡平野の縄文晩期末の貴重な資料である。

当遺跡出土の石器から福岡平野の縄文時代晩期末の時期において、縄文時代に普遍的に存在した剥片石器が存在していることを改めて確認することができる。(第8図)これらの剥片石器の素材については、使用痕のある剥片から判断する限り、不定形な剥片で、しかもどこかに自然面を有しており、さらにその自然面の状況



第8図 諸岡遺跡F区出土の石器〔註6より〕

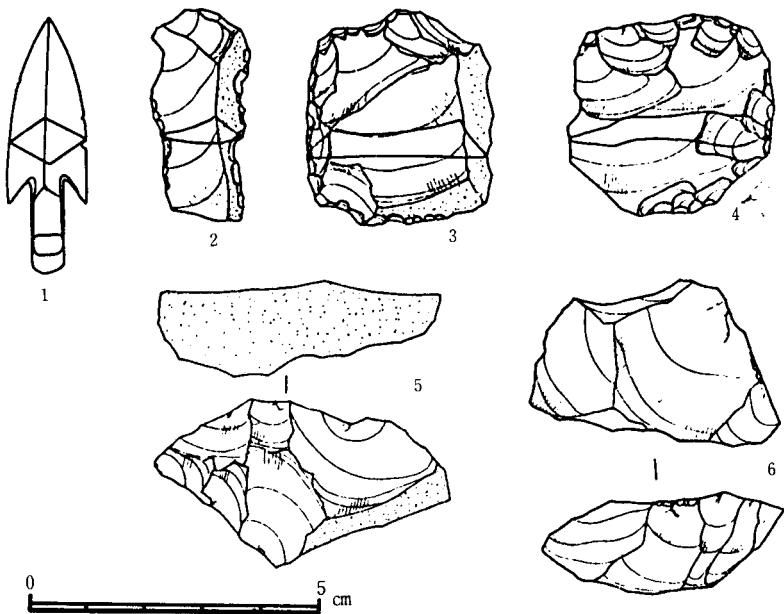
1～5 使用痕剥片, 6～8 石核, 9～11 石鏃, 12 撻器, 13 石槍, 14 扁平片刃石斧

から長さはせいぜい四センチほどである。また、剥片の形・大きさ、さらに大剥離面などから判断して、西北九州の繩文後期に盛行する縦長剥片の剥離技術を認めることはできない。ちなみに、当遺跡出土の六点の石核はいずれも四センチに満たない小形で、石核の形態および剥離技術は十郎川遺跡でのⅠ類・Ⅱ類に類似するものである。目的的剥片は、この石核から剥離されたたくさん剥片の中から、適当な大きさのものが選択されたものと考えられる。当遺跡から一点でしかも欠損品であるが、扁平片刃石斧が出土している。頁岩製で、刃部および器面は入念に研磨されている。刃部は片刃で、平面形は直線でなくやや丸味をおびている。この欠損品のみで、大陸系の磨製石器と断定できないであろうが、その可能性は充分あるものと思われる。夜白式土器の単純な時期での大陸系磨製石器の存在を示唆する資料と考えておきたい。いっぽう、当遺跡からは、十郎川遺跡・有田七田前遺跡と同様に、扁平打製石斧が出土していないことも一つの問題点とされよう。

6 宇木汲田遺跡(佐賀県唐津市大字宇木)

福岡平野から西に眼を移した時、唐津平野に繩文晩期の重要な遺跡が二つ存在する。その一つの宇木汲田遺跡は、唐津平野の南の奥に位置し、夕日山の北東麓とその東を流れる宇木川にはさまれた標高六メートルの水田に立地し、貝塚を伴っている。当遺跡では弥生時代中期から繩文晩期終末までの生活が営なまれているが、調査区のG-KⅠ6区、IⅠ5区の黒褐色土層下半部と、E-HⅠ3Ⅰ5区の黒褐色粘質土層からは、夜白式土器が単純に出土し、これらの土器と共に石器が出土している。(第9図)

石器の種類と数は、石鏃が六点、そのうち一点は磨製石鏃である。搔器・削器が九点、石錐が一点、石斧



第9図 宇土汲田遺跡出土の石器〔註7より〕

1 磨製石鏃, 2 削器, 3・4 掻器, 5・6 石核

が四点、磨石・敲石・凹石が八点、砥石と石皿が各二点、それに剥片が一四三点、石核が三八点となっている。石器のそれぞれの数は多いとはいえないが、縄文時代の伝統を有する石器類が主体を占めていることは明確である。また剥片石器の素材となり得る剥片やそれを剥離した石核の存在もこのことを物語っている。ただ、残念なことに当貝塚の夜白式土器に伴っている多量の石核や剥片についての実体を充分に知ることができない。示された一部の資料による限り、剥片は不定形で小形のもののようにあり、鈴桶型の剥片剥離技術は認めることができない。また、石核についても、十郎川遺跡出土の石核と類似していると考えられるものである。剥片の剥離技術は特に整ったものではなく、かなりアトランダム

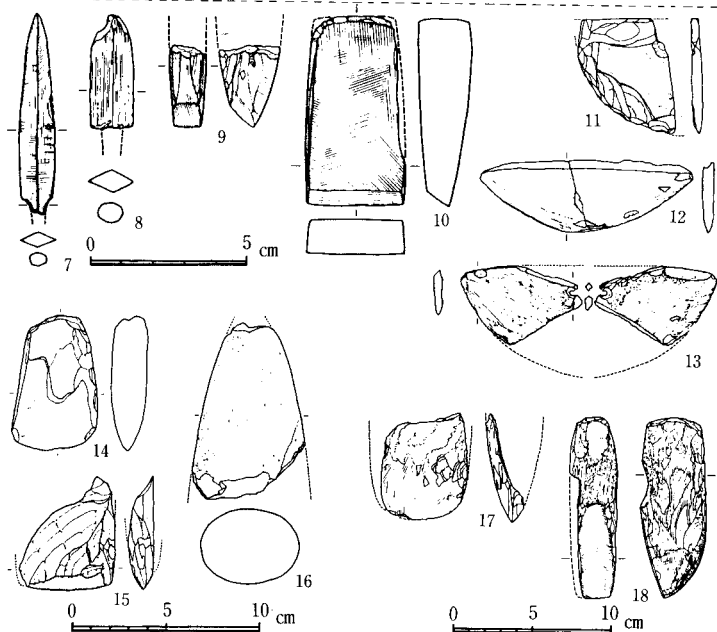
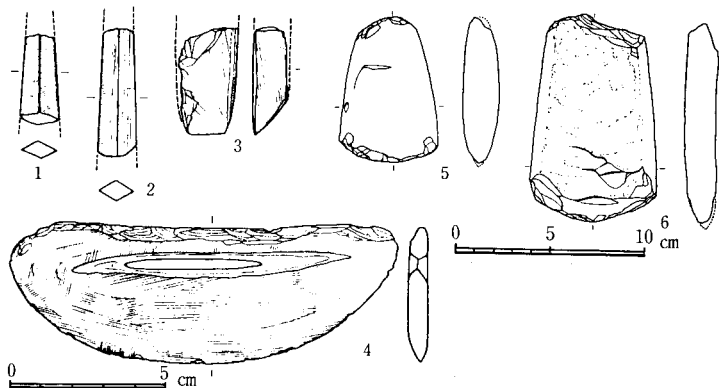
に剝離した多くの剝片の中から適当なものを選択して用いていたと考えた方がよさそうである。

いっぽう、繩文時代に認められなかった石器として、磨製石鏃一点がある。これは頁岩製の有茎磨製石鏃で、茎は扁平でやや長く、身は整った菱形を呈し、棘はするどく発達している。長さは四・五センチ、幅一・六センチ、厚さは〇・七センチという大きさである。これは明らかに大陸系の磨製石器であり、夜臼式石器に伴う二粒のコメや夜臼式土器底部の靱の圧痕と共に、繩文時代晩期の夜臼式土器の時期に大陸から新らしい文化が入ってきたことを如実に示すものである。唐津平野では晩期終末の夜臼式土器の時期には大陸系の磨製石器が出現し、いっぽう、繩文文化の伝統をもつ石器が存在することになる。扁平打製石斧は出土していない。

7 菜畑遺跡（佐賀県唐津市菜畑）

宇木汲田貝塚の北西約六キロ、松浦杵島山地北端の丘陵先端と小さな谷に菜畑遺跡は占地している。当遺跡では、繩文晩期後半から弥生時代にかけて、各種の遺構や遺物が出土しており、全国的にみても、この時期の屈指の遺跡である。晩期の土器については、晩期中ごろ・後半・終末それに晩期末と弥生初頭と層位的に細分している。石器については、大陸系の磨製石器と繩文系の石器に大別し、さらに晩期後半と終末とに分類している。以下それにしたがって石器の種類をあげてみる。

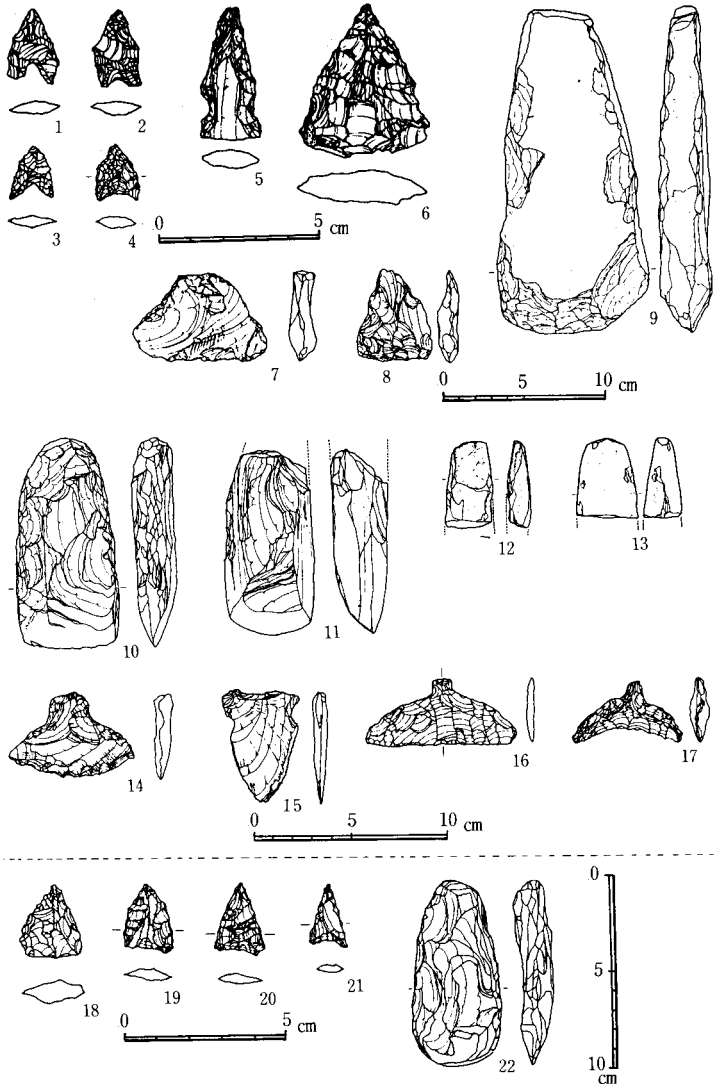
晩期後半の大陸系磨製石器としては、石庖丁・蛤刃石斧・扁平片刃石斧・磨製石鏃があり、終末の時期では、先に挙げたもののほか抉入石斧・石ノミ・有柄式石剣が加わる。蛤刃石斧・石庖丁をのぞくと他はいずれも一〇二点という数である。いっぽう繩文系の晩期後半の石器は多彩で、磨製石斧・石匙・搔器・削器・石鏃・石



第10図 菜畑遺跡出土の大陸系石器〔註8より〕

(1~6 晩期後半) 1・2 磨製石鎌, 3 柱状片刃石斧, 4 石庖丁, 5・6 磨製石斧

(7~18 晩期終末) 7・8 磨製石鎌, 9 柱状片刃石斧, 10 扁平片刃石斧, 11~13 石庖丁, 14~17 磨製石斧, 18 柱状挟入石斧



第11図 菜畑遺跡出土の縄文系の石器〔註8より〕

(1～17 晩期後半) 1～4 石鏃, 5・6 石銛, 7・8 搔器・削器,
 9 打製石斧, 10・11 局部磨製石斧, 12・13 小形磨製石斧, 14～17 石匙
 (18～22 晩期終末) 18～21 石鏃, 22 局部磨製石斧

鋸・敲石・磨石・石錘・砥石・浮子などと、西北九州の縄文時代に普遍的にみられるものがすべて出揃っている。終末では磨製石斧・石鏃・磨石・敲石などがあり、種類は少なくなっている。このように菜畑遺跡では、晩期後半の時期に大陸系の磨製石器が出現し、終末の夜白式土器の時期では弥生時代の磨製石器がほぼ出揃っていると考えられるほど充実した内容を示している。縄文系の石器についてはこれと逆な現象がみられる。すなわち、晩期後半に大陸系磨製石器が出現しているにもかかわらず、縄文系の石器がフルセットで存在し、終末の時期になって、大陸系磨製石器におされている観がある。(第10・11図) 先の宇木汲田貝塚での晩期終末の石器との相違はどのように考えればよいのか大きな問題とされる。また、菜畑遺跡では晩期の後半にかなりのウェイトで剝片石器が出土しているが、これらの石器の素材となった剝片や石核については不明であり、これも一つの問題とされよう。

福岡・早良平野、唐津平野の晩期の石器について概観したので、さらに西の地域での晩期の主要な遺跡をみることにする。

8 ケイマンゴー遺跡(長崎県西彼杵郡西海町横瀬)

西彼杵半島の北端に位置する西海町の、佐世保湾の海岸に接する標高三〇〜四〇メートルのゆるやかな丘陵と谷筋の小さな沢に面する場所に遺跡は立地している。

縄文晩期の土器の量は少ないが、その時期は、十郎川遺跡よりも若干先行するものと考えられ、大まかには晩期の後半とされる。石器は剝片石器・礫核石器が比較的多量に出土している。(第12図)



第12図 ケイマンゴ-遺跡出土の石器〔註9より〕

1 使用痕剥片, 2~8 剥片, 9~15 石鏃, 16 搔器, 17~19 サイドブレイド, 20~24 石核, 25~28 扁平打製石斧

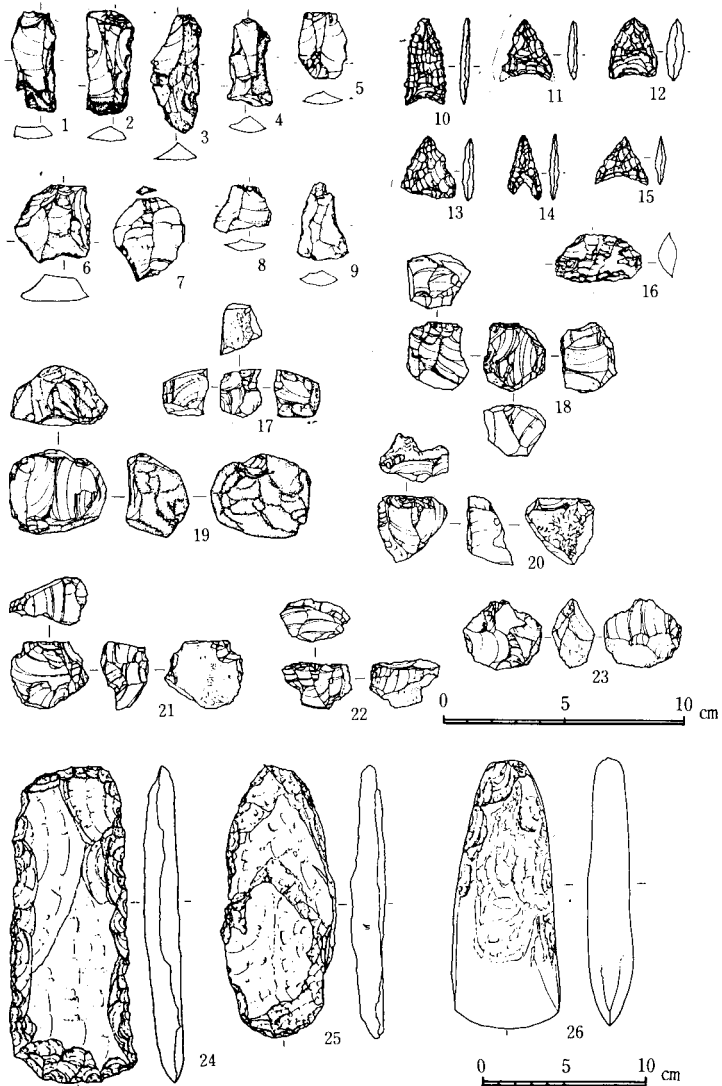
剥片石器では石鏃がもつとも多く八二点あり、ほかに、サイドブレード・石鋸・搔器・削器・彫器などがある。これらの定型的な剥片石器とは別に、剥片の一部に二次加工のあるものや、使用痕と考えられるものが観察される石器がある。これらの剥片石器の大半は黒曜石製である。いっぽう、礫核石器類では扁平打製石斧の出土が顕著で、石器の出土数の約一八%を占めている。ほかには、磨製石斧・敲石・磨石・砥石などが出土している。これらの石器の内容を十郎川遺跡と比較すると、十郎川遺跡では、明確なものが知られていない扁平打製石斧がケイマンゴウで存在し、しかも、石鏃に次ぐ数出土しているのである。これとは逆に、ケイマンゴウ遺跡では大陸系の磨製石器が一点もみられないのである。これらの石器の相違は十郎川遺跡の時期より若干先行するという时期的な差にその要因があるのか、あるいは地理的なことによるものであろうか。

晩期の剥片剥離技術を示す資料として、石核一六点と、二次加工・使用痕剥片を含む剥片二二二点がある。石核は一六点あり、形態や剥離作業面のあり方など、十郎川遺跡での石核の分類にしたがうと、三つに大別できそうである。一つは、打面が石核の一端に一つ準備され、前面から背面に向って剥離作業が進行するもので、最終的に背面に残すものであり、十郎川遺跡でのⅠ類に相当するものである。剥離作業があまり進んでないものでは柱状になり、進んだ段階では扁平な形をとる。次は、打面転位を行ないながら剥片剥離作業を進めているものであり、十郎川遺跡のⅡ類がこれに該当しよう。打面は転移が行なわれているため、平坦打面や自然打面となる。最後は、剥片の剥離作業が石核のほぼ全面におよぶものであり、十郎川遺跡のⅢ類と共通する。ケイマンゴウ遺跡出土の石核はすべてで一六点と、十郎川遺跡の一割にみないものであるが、剥片の剥離技術についてはよく符合している。

当遺跡の剥片については、その長さは二センチから三センチに集中する傾向があり、大半は四センチ内におさまってしまう。長さに対して幅は二センチ前後にピークがみられ、一センチから三センチ内にほとんど含まれる。縦の長さが横の長さよりわずかにまさるもので、後期の縦長剥片に比べ、全体にずんぐりした形をしており、十郎川遺跡の剥片に極めて類似している。ケイマンゴ遺跡出土の剥片の大半は、その大きさから先に述べた石核から剥離されたものと考えられるが、石核や剥片の自然面の付着の状況からして、目的的な剥片の大部分は石核から剥離された剥片の中でもっとも大きい（長い）ものであろう。また、剥片の主要剥離面の幅と、石核に残された最終剥離面の幅とを比較した時、後者の方がはるかに幅が狭いのである。これらのことから、ケイマンゴ遺跡での剥片石器・剥片と剥片剥離作業の関連は、限られた大きさの原石から、少なくとも三つの方法によって剥離した剥片の中から、適当な大きさのものを素材として選択して用いたと考えるべきであろう。これは、先に述べた十郎川遺跡と共通するあり方であり、同時に、西北九州における縄文時代晩期の一般的な傾向として把握することができそうである。

9 黒丸遺跡（長崎県大村市黒丸町）

多良岳に源を発し、大村湾へと注いでいる郡川の南岸、標高二七メートルの肥沃な水田地帯に当遺跡が立地している。⁽¹⁰⁾ 黒丸遺跡出土の土器は、粗製土器と精製研磨土器とに大別でき、組織痕土器が若干みられる。時期的には晩期の後半であり、先のケイマンゴ遺跡とほぼ同時期と考えられる。石器では打製石斧と共に黒曜石製の石核・剥片・碎片が多量に出土している。調査区によっては出土石器の時期が不明なものも含まれてい



第13図 黒丸遺跡出土の石器〔註10より〕

1～9 剥片・使用痕剥片，10～15 石鎌，16 サイドブレイド，17～23 石核，24・25 扁平打製石斧，26 局部磨製石斧

るが、大半は晩期の後半と考えてよいであろう。

石器の種類では、剥片石器は石鏃・サイドブレード・搔器・削器・石錐など、それに石核、剥片・碎片がある。いっぽう礫核石器は扁平打製石斧をはじめ、磨製石斧・礫器・敲石・磨石・砥石などである。(第13図)当遺跡の石器の特徴としては、石核・剥片・碎片などの多量の出土と扁平打製石斧の存在であろう。大陸系の磨製石器はケイマンゴ―遺跡と同様に一点も出土していないのである。当遺跡の剥片剥離技術についてを石核と剥片からみることにする。

石核は二六点あり、そのうち二二点は黒曜石製である。黒曜石の石核は三センチほどの小形なもので、いずれもどこかの部分に自然面を残していることで共通しているが、形態と剥離方法から三大別できそうである。石核の一端に一つの打面が準備され、剥離作業は一定方向で行なわれているもので、I類の細石核に相当しよう。打面を転移させながら多方向より剥離が行なわれる第II類の石核があり、量的にはもつとも多い。さらに当遺跡では亀の甲状に表裏から剥片剥離を行なう石核がある。剥片剥離の方法としては打面転移を行ないながら剥片を剥離するII類に類似しているといえよう。この石核は十郎川遺跡・ケイマンゴ―遺跡ではみられなかつたものである。いずれにせよ、当遺跡の石核の大部分は目的な剥片がこれ以上剥離することができないまであらゆる方法で剥離を行なっており、いわゆる残核の状況である。

これに対して、剥片は、縦に長い剥片と横に長い剥片とに大別できそうであるが、それぞれの剥片は共に、その長さや幅について、一定の数値を抽出することが困難であり、形状は不ぞろいである。強いて求めると、長さが三センチ前後で幅が二センチから三センチに集中する傾向がみられる。剥片の幅と石核の最終剥離面を

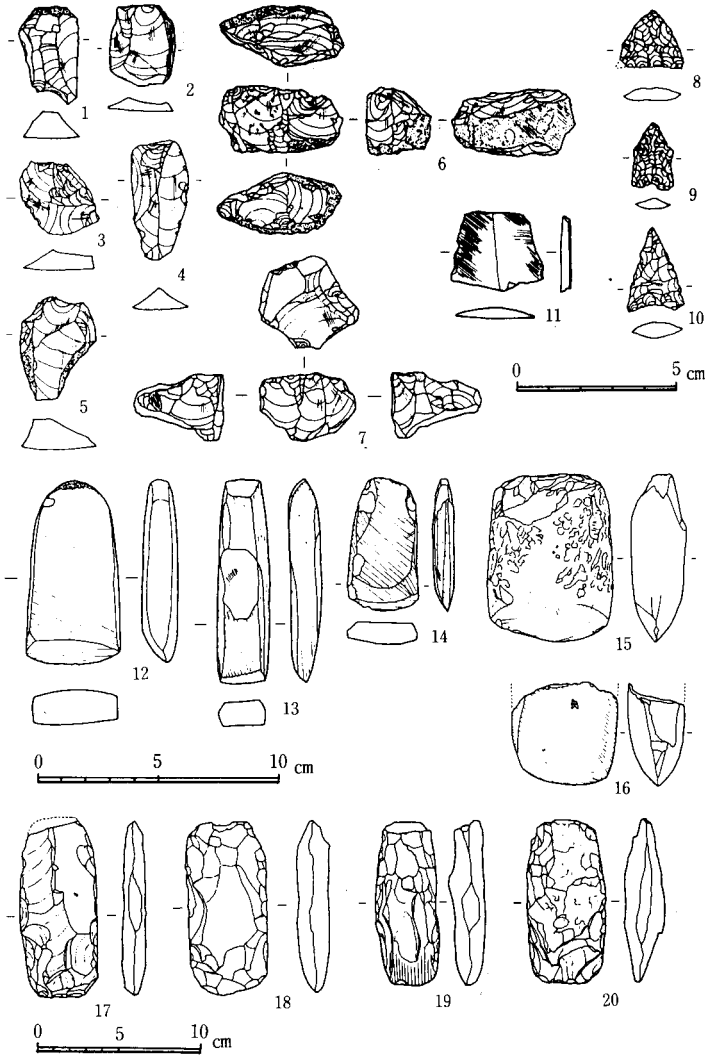
比較した時、やはり大きな差がみられ、当遺跡でも先の諸遺跡と同様、限られた大きさの黒曜石から多量の剝片を剝離し、それらの剝片の中から適当な大きさのものを選んで剝片石器に用いたものと考えられる。また、多量の剝片石器および剝片の中に、鈴桶型の縦長剝片剝離技術によるとみられる縦長剝片をみることができないことも先の諸遺跡と同じである。

10 朝日山遺跡（長崎県南高来郡小浜町）

島原半島の西側、千々石湾の小浜海岸を見おろす標高四〇～四五メートルの丘陵の尾根上に占地する朝日山遺跡は、晩期後半の遺跡であり、多量の石器が出土している。¹¹すなわち発掘で三〇一点、表採で一四八点の石器類が出土しているのである。（第14図）

土器は粗製土器と黒色磨研土器とがあり、粗製土器には、刻目突帯をもつものや、組織痕のある土器がみられる。石器の種類では、使用痕のある剝片がもつとも多く七二点、次は打製および磨製の石斧類が四一点、石鏃は二四点である。このほか搔器・削器・石錐・敲石・磨石・砥石・石錘など、それに石剣と考えられるものが出土している。剝片・碎片は二八四点あるが、石核は四点のみである。

当遺跡出土の石器の特徴は石斧類にあると考えられる。すなわち、石斧類四一点のうちその半数以上は扁平打製石斧であり、また磨製石斧の中に、柱状片刃石斧や扁平片刃石斧がみられるのである。特に柱状片刃石斧は、十郎川遺跡出土の柱状片刃石斧ほど厚味がなく、また胴部に抉入部も有していないが、縄文時代の磨製石斧とは一線を画するものと考えられる。磨製石剣の破片と考えられる石器の出土と考え合わせる時、この一点



第14図 朝日出遺跡出土の石器〔註11より〕

1～5 剥片，6・7 石核，8～10 石鏃，11 石剣，12 扁平片刃石斧，
13 柱状片刃石斧，14 扁平片刃石斧，15・16 蛤刃石斧，17～20 扁平打製
石斧

の柱状片刃石斧は大陸系の磨製石器とみなされるであろう。扁平片刃の磨製石斧についてもその可能性が残されている。島原半島地域での縄文晩期のいつの時期に、明確な大陸系の磨製石器が出現するかは大いに興味のある問題である。福岡・早良平野や唐津平野との対比を行なう際、特に重要視されよう。

11 宮の本遺跡（長崎県佐世保市高島町）

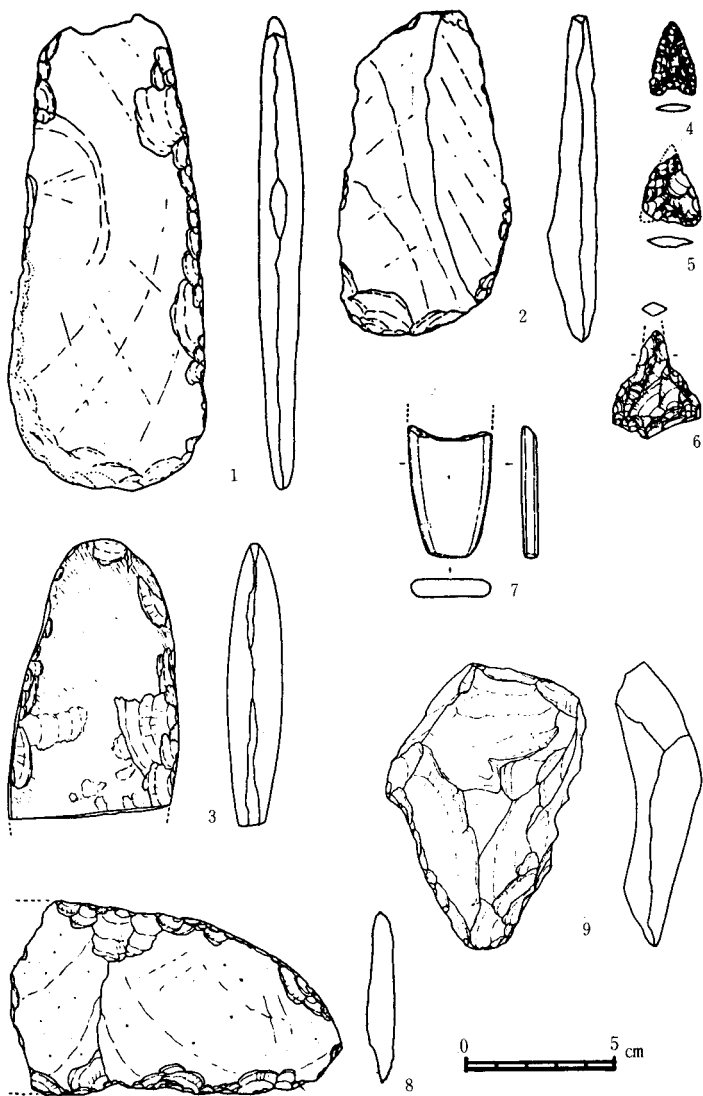
西海国立公園九十九島の一つである高島の標高四〇五メートルの砂丘上に位置する遺跡である。遺跡の西区に縄文晩期後半の包含層がみられ、そこから晩期の石器が出土している。（第15図）

当遺跡の石器として、扁平打製石斧一五点をはじめとして、石庖丁形石器・削器・磨製石斧・尖頭状礫器・砥石・石錘・石錐それに石鏃九点などが出土している。ほかに、時期についてやや明確さを欠くものとして、石剣の一部分がある。黒曜石製の剝片や石核は出土していないようであり、また、剝片石器も少ない。

当遺跡の石器を特徴づけるは扁平打製石斧と石庖丁形石器であろう。扁平打製石斧は玄武岩を主として用いており、大きさは一七〜一〇センチと長さに開きがあるものの、幅は五〜六センチとほぼ統一されている。石庖丁形石器は八点で、玄武岩製の大型の横長剝片を素材に用い、半月形もしくは短冊形を呈する。

以上、西北九州地域の海岸部沿いに立地する縄文時代晩期の主要な遺跡について、特に石器組成と剝片石器の素材である剝片・石核のあり方をみてきた。

ここにあげた晩期の一一遺跡は、地理的には福岡・佐賀それに長崎の地域の海岸沿いにまたがっているが、北九州の長行、福岡平野から唐津平野にかけての諸岡・有田七田前・十郎川・広田・宇木汲田・菜畑の諸遺跡、



第15図 宮の本遺跡出土の石器〔註12より〕

1・2 扁平打製石斧，3 磨製石斧，4・5 石鏃，6 石錐，7 石剣，
8 石庖丁形石器，9 削器

それに西九州の宮の本・ケイマンゴウ・黒丸・朝日山の諸遺跡の三つのブロックと考えられる。いっぽう、時的には、広田遺跡のみが後期末あるいは晩期初頭であるが、その外はいずれも後期後半から末葉として一括されるであろう。

そこで、これからのことを考慮しながら、縄文晩期における剥片剥離技術・石器組成のあり方などについて、若干の予察を行なってまとめにかえたい。

三、晩期の石器

1 晩期の剥片剥離技術

縄文時代の晩期を通じて、打製石鏃をはじめとする黒曜石製の剥片石器が存在することは先にみてきた通りである。これらの剥片石器の素材となる剥片および石核については、西北九州の縄文後期に盛行する「鈴桶型縦長剥片剥離技術」と異なる剥片剥離技術が存在している。これはせいぜい四〜五センチほどの大きさの黒曜石の原石を母岩に用いて、それらから剥離した多量の剥片の中から、剥片石器の素材にふさわしい大きさ、形のものを選択して利用しているのである。この目的的な剥片を剥離する技術については、石核にみられる打面の設定位置や剥離の方向、さらに剥離面の状況などから三〜四類に大別することができ、そこにある程度の規則性を抽出することが可能である。しかしながらこれは原石の形や大きさなどに、大きく左右されているものと考えられ、実際、三〜四類と大別した分類のどれにも該当させることのできない石核が多数存在するのであ

る。石核から剝離された剝片についても、剝片の数に比べて著しく石器の数が少ないことや、剝片を区分するときの基本となる「縦長剝片」や「横長剝片」という分類すら困難なことが、晩期の剝片剝離技術の特徴を端的に示めしている。さらに、剝片の幅と石核に残された最終剝離面の幅とを比較した時、大半のものには幅に大きな開きが認められるのである。これらのことは、母岩の大きさや形によるいく通りかの剝離方法に従いながらアトランダムに剝片の剝離作業を行ない、その結果剝離された剝片の中から一部の大きな剝片を選択して用いたことを示唆しているといえよう。

この剝片剝離技術は、後期末あるいは晩期初頭の広田遺跡においても認められ、また、晩期終末の十郎川遺跡でも明確にみられることから、晩期の初頭から終末の時期まで普遍的に存在するものと判断できる。そこで、西北九州の縄文後期に盛行する鈴桶型剝片剝離技術に対して、晩期のこの剝片剝離技術を、好資料が多量に出土している十郎川遺跡に代表させて「十郎川型剝片剝離技術」と呼ぶことにしたい。

2 晩期の石器組成

一遺跡における石器組成を考える時、遺物の出土点数と同様に、その遺跡の発掘面積や遺跡の広がりが予想される範囲を完掘した場合とそうでない場合とで大きく異なってくる。特に石器組成の場合では遺跡における場の機能と石器の種類の関連があり、またある地域のある時期における本来の石器の種類が一遺跡にすべて揃っているという保障もないのである。それだけに、出土した石器の種類とその数量だけによって、そのままその遺跡の性格や生産活動のあり方を決定づけることができないケースも当然ありえよう。

縄文時代晩期は一万年近く継続した縄文文化の最終的な時間的位置づけがなされると共に、いつぼうでは、次の新しい弥生文化に移行する直前である前段階的な要素を持つてゐるわけである。それだけに石器組成の上で晩期というある一定の時間的な幅の中だけでも異なることが予想される。また、縄文文化の最後の姿をどうぞ、かつ新文化を撰取するという状況を目前に控かえてゐる時期ということは、時間的なことと同じくらいに比重で、自然地理的環境が加味されるものと思われる。石器組成のあり方にも時間的・空間的な要素が多分に関係し、特に縄文晩期は、縄文文化と弥生文化の過渡的な位置にあるだけに、その傾向は強いであろう。このように複雑な諸条件が常につきまとうだけに、晩期の石器研究はできるだけ短期間限定された晩期での時間的位置づけや、地理的環境を正確に把握した上で本来行なわれるべきである。そのようなわけでここでは、先に挙げた遺跡から大まかな石器組成の傾向をみるにとどめたい。

晩期前半の時期での好資料を欠いているが、初頭の広田遺跡による限り、縄文時代に普遍的にみられる石器がすべて揃つており、各種の剝片石器・礫核石器・礫塊石器が出土している。ここでは、扁平打製石斧の存在が一つの特徴とされよう。また、この遺跡では、鈴桶型縦長剝片剝離技術によると判断できる縦長剝片素材の剝片石器が石器組成中に認められる。これ以後の遺跡での石器組成中にほとんどみられないだけに注目される。晩期後半から終末にかけての時期では、北九州の長行遺跡、長崎県のケイマンゴウ・黒丸・朝日山・宮の本の諸遺跡で扁平打製石斧が、石器組成中で大きな位置を占めてゐる。また、長行遺跡以外では、石鏃などの剝片石器も同様に存在している。扁平打製石斧の存在をのぞくと、基本的には縄文時代における石器の普遍的なあり方と大きな違いを見出すことができない。ただ、朝日山・宮ノ本の両遺跡で、大陸系磨製石器の存在を

示唆する資料がみられる。唐津市の菜畑遺跡は晩期後半から終末までの時期であり、先の五遺跡と時間的に重なる期間を持っていながら、石器組成の上で異なる点が認められる。それは、各種の大陸系磨製石器が存在すること、逆に扁平打製石斧が石器組成中にみられないことである。そのいっぽう、打製石鏃・石匙・搔器・削器・石斧など、縄文文化に普遍的にみられるいわゆる縄文系の石器が多量に出土している。剥片石器の素材となった剥片や石核は出土していないようであるが、剥片石器は全ての石器の五割以上を占めているのである。菜畑遺跡の石器組成の特徴は、まさに縄文系の石器と大陸系の石器が共に完全な姿でみられるということであろうか。

晩期終末の時期にほぼ限定される福岡平野・早良平野の十郎川・有田七田前・諸岡F、それに唐津平野の宇木汲田の諸遺跡は、菜畑遺跡とほぼ同様な石器組成がみられる。それは、扁平打製石斧の明確なものがなく、逆に、数量や種類の上で違いがあるものの、大陸系磨製石斧が存在することである。いっぽう縄文系の石器については、石鏃や搔器・削器などの剥片石器や石斧などの礫核石器も存在しているが、菜畑遺跡や、晩期以前の遺跡に比較すると全体的に質・量ともに貧弱な傾向がうかがえる。ただ、これが福岡・早良平野での晩期終末における普遍的な状況としてとらえられるものかどうかは、十郎川遺跡のような剥片石器のあり方が存在することから、さらに究明した上で結論を出すべきであろう。しかしながら、縄文晩期終末の石器組成で、一つの傾向として、福岡・早良平野や唐津平野の遺跡では、扁平打製石斧が石器組成中に含まれず、逆に、大陸系磨製石器が入るといふあり方が示されている。十郎川・有田七田前・諸岡F・宇木汲田・菜畑の諸遺跡とそれ以外の遺跡での石器組成の相異点の原因が、時間的なものなのか、それとも地域的なものにより大きな要素が

求められるのか、あるいはその両者によるものかなど、さらには具体的なより多くの資料を通じて追究されなければならぬ大きな問題である。

引用文献

註

(1) 橘昌信「縦長剝片―西北九州における縄文時代の石器

研究―」『史学論叢 九』昭和五三年 「石鋸」「同

一〇」昭和五四年 「石匙」「同一」昭和五五年

「折断剝片とサイドブレイド」「同一」昭和五六年

「彫器」「同一」昭和五七年

(2) 吉岡完祐・他「十郎川―福岡市早良平野石丸・古川遺

跡―」住宅・都市整備公団 昭和五七年

橘昌信 「B区域の調査(2)出土遺物B石器」

(3) 小池史哲「広田遺跡〇区」「二丈・浜玉道路関係埋蔵文

化財調査報告」福岡県教育委員会 昭和五五年

(4) 山口信義「縄文時代の遺構遺物」「長行遺跡」北九州

市埋蔵文化財調査報告書第二〇集」北九州教育文化事

業団 昭和五八年

(5) 山崎純男・山口讓治「有田七田前遺跡」「福岡市埋蔵文

化財調査報告書第九五集」福岡市教育委員会 昭和五

八年

(6) 沢皇臣「諸岡遺跡F区」「板付周辺遺跡調査報告書(3)」

「福岡市埋蔵文化財調査報告書第三六集」福岡市教育

委員会 昭和五一年

(7) 賀川光夫「宇木汲田遺跡・石器」「末廬国」唐津湾周辺

遺跡調査委員会 昭和五七年

(8) 中島直幸・田島龍太・他「菜畑」唐津市文化財調査報

告書第五集」唐津市教育委員会 昭和五七年

(9) 高野晋司・副島和明・他「ケイマンゴ―遺跡」長崎県

文化財調査報告書第五二集」昭和五五年

(10) 稲富裕和・他「黒丸遺跡」大村市黒丸遺跡調査会 昭

和五五年

(11) 高野晋司「朝日山遺跡・石器」「小浜町文化財調査報告

書第一集」長崎県小浜町教育委員会 昭和五六年

(12) 久村貞男・他「宮の本遺跡」佐世保市埋蔵文化財調査

報告書」佐世保市教育委員会 昭和五五年

挿図の第2図から第12図は、註(2)～(12)の各文献から一部を抽出して引用したものである。